

『撰大乘論』における出世間心の生起

佐藤俊哉

『撰大乘論』では転識の根底にあるアーラヤ識の存在をいくつかの観点から論証している。その中に、出世間心の生起について次のように説く部分がある。

最清浄法界等流の聞熏習の種子より、それ(出世間心)は生じる。

『成唯識論』によれば、種子新熏説の立場にたつ難陀・勝軍等は、この部分を引用して無漏種子も新熏であると主張する。それに対して本有説が主張されており、また、世親が最清浄法界等流を所説の法で経等であると註釈するのに対して、その説は対象的思惟の立場にあるとして批判されるなど、問題点の多い箇所である。瑜伽行唯識派における究極の目標が涅槃と菩提の証得にあるとするならば、出世間心の生起に関する考察は、その根幹にかかわる問題であると思われる。本稿ではその点を、無著の著作とされる『撰大乘論』より、註釈書を参考にしながらみていくことにする。

玄奘訳でいうならば「彼果智分」において、法身の常住が

説かれている。すなわち、法身は時間的に無限定と考えられているが、真諦訳の世親釈には次のようである。

一切衆生在於生死。無有衆生本無法身。恒与法身相応故。此相応無始法自然成。如此相応説名為得。此得非触得。非根識所証故。

為離相応得故立此問。如経言於衆生聚中。無衆生在法身外。如無一色在虚空外。以一切衆生皆不離法身故。法身於衆生本來是得。

玄奘訳・笈多共行矩等訳に比較して、真諦訳には独自の解釈がなされているが、出世間心の生起について考察する上で示唆に富む内容を有している。引用文によれば、すべての衆生は常に法身と相応しており、その場合の相応を得と称している。さらに経が引用されており、衆生が法身の外に存在しないのは、あたかも色が虚空外に存在しないのと同様であると註釈する。この部分は法身の常住という「彼果智分」の所説に対して、衆生との関係から射た解釈がなされている。法身と衆生の相応を説くのは如来蔵思想の特色と考えられるが、真諦訳によれば、得と触得という二つの表現が用いられ

ており、根識の所証ではないので得は触得ではないと述べられている。

この点に関して、「入所知相分」では法界の現証が、無分別智、円成実性への悟入と共に説かれており、さらに一つの偈頌を挟んで次のように説かれている。

このように、この菩薩は唯識性に悟入するので所知相に悟入する。それに悟入するので歡喜地に悟入する。法界によく通達し、如来の家に生じ、すべての衆生と心平等、すべての菩薩と心平等、そして、すべての仏と心平等を得る。それが、その（菩薩の）見道である。

『撰大乘論』によれば唯識性に悟入する目的は一切智智を獲得するためであるが、この歡喜地に悟入することによって、法界に通達し、如来の家に生じることになる。歡喜地に関する描写を、ここでは註釈書を参考にしながらみていくと、まず世親釈には次のようにある。

すべての仏と心平等を得る、というのは、その分位で諸仏の法身が得られることで、それ（法身）を得ることによって、すべての仏と心平等が得られることである。

一方、無性積を参照すると次のようにある。

すべての仏と心平等を得る、というのは、彼の法身を自らもまた得る、と思うからである。

「入所知相分」によれば、菩薩は歡喜地に悟入することによ

『撰大乘論』における出世間心の生起（佐藤）

って、すべての仏と心平等が得られるが、世親釈、無性積に、諸仏の法身が得られる、あるいは彼の法身を自らもまた得る、とあるように、二人の註釈者は同趣意のことを述べている。先に引用した真諦訳の世親釈に、法身の得のみならず触得という表現が用いられていたが、法界が現証されるこの歡喜地に、出世間心が生起する一つの転換点があると考えられる。さらに留意すべき点として、無性積は「すべての衆生と心平等を得る」を、すべての衆生は如来蔵であると註釈する。この分位に到って法身が得られ、それと同時に如来蔵ということも了解されるのである。ここに瑜伽行唯識派の如来蔵に対する解釈の一端が示されている。

さて、ここまでは見道を中心に見てきたが、出世間心すなわち正見は、他の言音、そして各自の如理作意との二つの因によって生じるとされる。「彼果智分」によれば、諸仏の法界はあらゆる時に五業（災横・悪趣・非方便・有身・乗からの救済）を有している。つまり、法界自体にはたらきがあると捉えられているが、『撰大乘論』では聞熏習をはじめとした種々なる実践的概念が随所に説かれており、法身は瑜伽行者の主体的努力によって得られることが強調される。そして「彼果智分」では、法身はアーラヤ識を転ずることによって得られると説かれている。「所知依分」では『阿毘達磨大乘経』の偈頌として著名である「無始時來の界は一切の法の等しく所依

とするとところである。それがあるので一切の趣(輪廻)があり、また涅槃の証得もある」を、アーラヤ識の教証として引用する。この偈頌が『宝性論』にも引用される点については省略するが、「無始時來の界」は一切の趣と涅槃の所依とされる。染と浄という異質なものが、この「無始時來の界」を依りどころとしているわけだが、無著自身、アーラヤ識は諸の雜染法の因であるとし、法身はそれを転ずることによって得られると述べている。「彼果智分」ではその点を次のように説いている。

諸仏の法身にいかなる相があるのか。略説すれば、五相があると知るべきである。転依を相とする、とは、あらゆる障礙のある雜染分に属する依他起性が転滅されるならば、あらゆる障礙より解脱して、すべての法に対して自在に住する。(すなわち)清淨分に属する依他起性に転ずるからである。

引用文によれば転依を、雜染分に属する依他起性から清淨分に属する依他起性と捉えている。このことから法身の証得は、依他起性において、雜染分から清淨分への転換を条件としていることが理解できる。「所知相分」では、いわゆる二分依他の思想が説かれており、「果斷分」ではその思想を取り入れることによって無住處涅槃について説述する。ここでは輪廻を雜染分に属する依他起性とし、涅槃を清淨分に属する依他起性として、相対する概念が依他起性を媒介に論じられ

ており、依他起性が二分に属することを明示している。転依とは、その依他起性が雜染分から清淨分に、質的に転換することである。真諦訳の世親釈にみられる解釈は、『撰大乘論』のこのような所説によるものと思われる。(なお『撰大乘論』において、聞薰習の種子は下中上品いずれも法身の種子であると説かれていたが、紙幅の制約よりその点については省略する。)

- 1 E. Lamotte, *La somme du grand véhicule d'Aśaṅga Tome I*, p. 19, 1973.
- 2 結城令聞『心意識論より見たる唯識思想史』六二八頁～六三〇頁、六五〇頁～六六〇頁、東方文化学院東京研究所 昭和一〇年。
- 3 玉城康四郎「未來にわたる仏教學轉換の根本課題—新教相判釈論—」日本大学人文科学研究所研究紀要三一 一六頁～一九頁、一九八五。同「仏教の思想 1 原始仏教」一三頁～一五頁、五四頁～五六頁等、法藏館 昭和六〇年。
- 4 大正三一 二五二頁b。
- 5 ラモット前掲書 五三頁。
- 6 北京版西藏大藏經—以下、北京と略す—一一二二九四頁c、なお世親は、彼の法界と自己の法界との無差別をみることも、とも註釈する(北京一一二 二九二頁e)。
- 7 北京一一三 二八頁b。
- 8 同上、ただし玄奘訳には「衆生」ではなく「諸法」とある。すなわち「一切諸法皆如來藏」(大正三一 一六頁b)。
- 9 この点については本性清淨を参照。
- 10 世親・無性は、法界とは法身であると註釈する(北京一一二 三〇七頁b、同一一三四八頁d)。
- 11 高崎直道『如來藏思想の形成』三五〇頁～三六六頁、春秋社 昭和四九年等を参照。
- 12 ラモット前掲書 八四頁。

△キーワード▽ 法身、觸得、法界

(大正大学副手)